

学業達成場面における防衛的悲観主義者の 帰属スタイルに関する検討

荒木 友希子

(金沢大学人文学類)

Key words: 防衛的悲観主義, 帰属スタイル, 学業達成場面

【 目的 】

悲観的な思考や態度は精神的健康に対して否定的な影響を与えるものとされている。たとえば、学習性無力感に関する研究では、楽観主義が抑うつに陥る予防策として有効であり、精神的健康を促進させるという見解が得られている (Seligman, 1991)。しかし Norem & Cantor (1986) は学業達成場面において不安が高く悲観的でありながら良い成績を維持する学生の存在を指摘し、悲観的思考を認知的対処方略とする防衛的悲観主義 (Defensive Pessimism: DP) の概念を提唱した。そして精神的健康に対して否定的な影響を与える悲観主義を真の悲観主義 (Realistic Pessimism: RP) と呼び、DP と区別した。また、DP の対照となる概念として方略的楽観主義 (Strategic Optimism: 以下 SO とする) という概念が設けられている。これらの概念は領域に限定された認知的方略として定義されている。

ところで、失敗の原因を内的 (自分のせいで失敗した)、安定的 (次もまた失敗するだろう)、全体的 (どの場面でも失敗するだろう) に帰属する傾向は、抑うつの帰属スタイルと呼ばれており、悲観主義者に多く認められる (Seligman, 1991) とされている。一方、DP 者の帰属スタイルに関しては、Norem (2001) が DP 者は失敗も成功も自分のせいにすると言及しているのみである。そこで本研究では、学業達成場面における DP 者の帰属スタイルに関して検討をおこなうこととした。荒木 (2008) の作成した学業達成場面の防衛的悲観主義尺度 (JDPI) を用いて、全回答者を JDPI の下位尺度の組み合わせによって認知的対処方略の異なるパターンに分類し、そしてそれらの認知的対処方略のパターンの違いによって帰属スタイルに差があるかどうかについて検討する。

【 方法 】

調査協力者および手続き 日本大学生 220 名を対象に調査用紙を配布した。教職課程の心理学の講義の際に、無記名方式の調査用紙を配布し、本調査研究につ

いてのインフォームド Consent をおこなった。調査への協力に同意した場合にはその場で回答するように依頼し、回収した。

調査内容 (1) JDPI (荒木, 2008) : 大学生を対象に学業達成場面における DP の程度を査定する。6 段階評定で、4 つの下位尺度 (悲観、過去の成績、肯定的熟考、努力)、24 項目から構成されている。(2) 領域別帰属スタイル尺度 (成田・佐藤, 2005) : 大学生を対象に領域別 (対人・達成) の帰属スタイルを査定する。各領域について 3 つのネガティブな出来事 (Table 1) を提示した。その出来事が起こった原因を想像してひとつづつ自由記述で回答し、その原因について①内天性、②安定性、③全体性、の 3 つの次元ごとに 7 段階評定で回答する。数値が高いほどネガティブな出来事の原因を内的、安定的、全体的に帰属する傾向 (いわゆる抑うつの帰属スタイル) を表す。なお、本研究では学業達成場面における帰属スタイルの査定を目的としたため、対人領域については調査の対象外とした。

Table 1. 領域別帰属スタイル尺度における達成領域の出来事一覧

1	もしもあなたが学校でできた課題を全部やり終えることができなかったとしたら。
2	もしもあなたが授業中の先生の質問にほとんど答えることができなかったとしたら。
3	もしもあなたがテストの問題を解くことができなかったとしたら。

【 結果 と 考察 】

記入漏れのあった回答を除外し、分析の対象は 204 (男性 110, 女性 89) 名が分析の対象となった。平均年齢 19.38 歳 (SD1.09) であった。JDPI について主因子法・Promax 回転による因子分析を行った結果、複数の因子に重複して .04 以上の負荷量を示した 3 項目が認められたため、3 項目を除外して再度分析をおこなった。その結果、荒木 (2008) と同じ 4 因子構造となった。

認知的対処方略のパターンの分類

全回答者に対してグループ内平均連結法によるクラスタ分析をおこなった。その際、下位尺度ごとに算出した因子得点を用いた。その結果、3 つの解釈可能なクラスタが得られた。第 1 クラスタには 66 名、第 2 ク

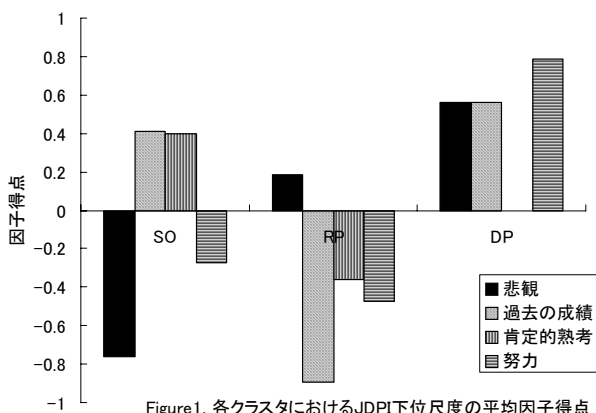


Figure 1. 各クラスタにおけるJDPI下位尺度の平均因子得点

クラスタには72名、第3クラスタには66名が含まれていた。Figure 1に各クラスタの平均因子得点を示した。次に、得られた4つのクラスタを独立変数、各因子得点を従属変数とした1要因の分散分析をそれぞれ行った。その結果すべての因子得点において群の主効果は有意であった ($p < .01$)。そこでTukeyのHSD法による下位検定を行った結果、悲観については第3>2>1、過去の成績については第1=3>2、肯定的熟考については第1>3>2、努力については第3>1=2クラスタの順で有意な差があった ($p < .01$)。

これらの結果から各クラスタは以下のような特徴を持つと考えた。第1クラスタは、他のクラスタと比べて悲観得点が低く、過去の成功および肯定的熟考得点は高いことからDPとは対照的な位置に属するSO群とした。第2クラスタは、他のクラスタと比べて過去の成功得点が低く、その他の得点も高くないことからRP群とした。第3クラスタは、悲観、過去の成績および努力得点が高いことからDP群とした。

本研究では、JDPIの下位尺度の組み合わせによって認知的対処方略の異なるパターンが3つ抽出された。この結果は、荒木(2008)におけるDP群の下位尺度得点の組み合わせと一致した。

各クラスタにおける帰属スタイルの関係

Table2に各クラスタにおける領域別帰属スタイルの平均評定値と標準偏差を示した。得られた3つのク

次元	群	総得点		出来事1		出来事2		出来事3	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
内在性	SO群	17.20	2.82	5.56	1.67	5.73	1.54	5.91	1.21
	RP群	17.04	2.89	5.57	1.41	5.64	1.41	5.83	1.29
	DP群	16.73	3.66	5.02	1.78	5.91	1.55	5.80	1.54
安定性	SO群	16.38	2.69	5.44	1.35	5.53	1.29	5.41	1.35
	RP群	16.94	3.20	5.63	1.44	5.57	1.30	5.75	1.17
	DP群	16.47	3.35	5.48	1.39	5.64	1.41	5.35	1.46
全体性	SO群	14.39	3.65	5.44	1.51	4.53	1.70	4.42	1.65
	RP群	14.89	3.09	5.29	1.68	4.75	1.56	4.85	1.53
	DP群	14.45	3.28	5.30	1.48	4.79	1.64	4.36	1.72

防衛的悲観主義者の帰属スタイル

スタを独立変数、領域別帰属スタイル尺度における各次元の評定値を従属変数とした1要因の分散分析をそれぞれ行った。その結果、どの評定値においても群の主効果に有意な差はみられなかった。出来事1の内在性次元においてのみ、群の主効果に有意な傾向 ($p < .10$) がみられたにとどまった。下位検定の結果、SOおよびRP群は、DP群に比べ、より得点が高かった。SOおよびRP群は出来事1の失敗の原因をより内的に帰属する傾向がうかがえた。また、自由記述の内容について検討した結果、ほとんどが内的帰属であったことから、領域別帰属スタイルの評定値には偏りがみられた。

領域別帰属スタイルではネガティブな原因帰属についての評定であった。今後は成功などポジティブな出来事の原因帰属過程についても検討する必要があると思われる。

【参考文献】

- 荒木友希子 (2008). 日本人大学生を対象とした学業達成場面における防衛的悲観主義の検討 心理学研究, 79, 9-17.
- 成田健一・佐藤充子 (2005). 領域別帰属スタイル尺度の作成の試み 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集 183-184.
- Norem, J.K. (2001). Defensive pessimism, optimism, and pessimism. In E.C.Chang (Ed.), *Optimism and Pessimism: Implications for theory, research, and practice*. Washington, D.C.: American Psychological Association. pp.77-100.
- Norem, J.K. & Cantor, E.C. (1986). Anticipatory and post hoc cushioning strategies: Optimism and defensive pessimism in "risky" situations. *Cognitive Research and Therapy*, 10, 347-362.
- Seligman, M.E.P. (1991). *Learned Optimism*. New York: Knopf.

【注】本研究は平成15,17~18年度科学研究費補助金若手研究(B) (課題番号: 15730312) の補助を受けて行われた。

(あらかきゆきこ)